中国四国教育学会　教育学研究紀要　第47巻　第2部（2001年）

日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について

大浜　るい子（広　島　大　学）
荒牧　ちさ子（摂　南　大　学）
曾　　儀　婷（広島大学大学院・院生）

1．はじめに

日本語学習者にとって人称代名詞の使用は必ずしも容易ではない（蔣 1999，三輪 2000）。数多い表現[1]の内どれを用いるかという問題に加えて，そもそも使用するべきか否かをどのように判断するかという問題がある。前者については，人称代名詞の他に親族名称，職業名，肩書き，固有名詞までが選択肢に入ってくるため，問題はより複雑になる。学習者の便を考え，2人称は「あなた」一つに統一しようといった思い切った提案（野本 1979，梅棹 1988）もあるが，母語話者にとって不自然な印象は免れない。また人称代名詞の使用自体が，会話のまとまりを壊したり（神崎 1994），攻撃的な印象を与えたりする（金田一 1988）という2つ目の問題も大きい。敬語や日本人の言語行動のあり方と密接に関わるもの（三輪 2000）だけに容易に結論を出せない問題であるが，ここでは，日本語母語話者の自然な会話での使用実態と日本語教科書での扱い方を調査し，日本語教育での指導の指針を得たいと思う。なお本稿では1人称と2人称のみを扱う。

2．自称詞・対称詞に関する先行研究

人称代名詞とは会話の役割を表す語である。それ故多くの言語では，それぞれ「話し手」「聞き手」を意味する一形式があるのみである。ところが日本語の「話し手」「聞き手」は，社会的上下関係，親疎関係，使用者の性，場面などで「わたし，わたくし，ぼく，おれ，うち，わし」「あなた，あんた，君，お前，自分，われ」など様々な形が使われる。また人称代名詞ではなく，親族名称，職業名，肩書き，固有名詞の方が適切な場合もある。まずこれらの使い分けについて，これまでに議論されてきたことを整理しよう。以下では，人称代名詞，親族名称，職業名，肩書き，固有名詞をまとめて，「自称詞」「対称詞」と呼ぶ。

2.1．自称詞あるいは対称詞の使い分けについて

鈴木（1973）によると，自称詞あるいは対称詞の使い分けは，相手が自己より上位に位置する人か下位に位置する人かで決まると言う。

自称詞：目上には人称代名詞あるいは固有名詞を使用する。目下には親族名称，職業名，肩書きを使用する。

対称詞：目上には親族名称，職業名，肩書きを使用する。目下には人称代名詞あるいは固有名詞を使用する。

これは言い直せば，相手との関係で上位にある場合は，自分のことを称するときも相手から称せられるときも常に親族名称，職業名，肩書きが使われ，反対に相手との関係で下位にある場合は，いずれの場合も常に人称代名詞あるいは固有名詞が使われるということである。家庭を舞台にした漫画の調査がそれは裏付けている（陣内 1990，大西 1992）。しかしまた一方で，実際の場面ではこの原則が通用しない場合もいくつか指摘されており，例えば職場での目下に対する自称詞は肩書きではなく人称代名詞が通常である（大西 1992），また昨今の家庭では兄弟は互いに固有名詞を対称詞とし，また自称詞も親族名称ではなく人称代名詞を使用する傾向にある（三輪 2000）などである。上にあげた原則の根底には上下関係があるので，それが表面化されることをよしとしない社会の変化があるのであろう。

また大西（1992）は自称詞として親族名称や職業名，肩書きあるいは固有名詞が使用されることがあることを認めながら，鈴木（1973）ではそのことが強調されすぎ，人称代名詞が隅に追いやられていると言う。大西（1992）は人称代名詞以外のこれらの自称詞は一種のベビートークであり，大人の日常生活ではむしろ人称代名詞が大部分を占めるはずであると述べている。

日本語学習者はいずれにしても学習項目を限定しなければならない。その際より多くの場面で利用できる知識が優先されてよい。とすれば，自称詞に関しては様々な人称代名詞の内のどれを用いるかという問題に，

そして対称詞に関しては相手に応じて人称代名詞，親族名称，職業名，肩書き，固有名詞の内のどれを用いるかという問題に還元することができるだろう。

2.2. 自称詞あるいは対称詞の不使用について

次に問題にしなければならないのは，そもそも人称代名詞であろうとそれ以外の形であろうと，日本語では自称詞や対称詞を使用しない傾向があるという点についてである。先行研究を見ると，これは本来あったものが省略されたという理解ではなく，大部分は最初から出現し得ない構文的な手段（伊豆山 1994）であると理解されているようである。これは，例えば甲斐澤（1992）の調査を見てもうなづける。甲斐澤（1992）では10時間分のテレビの対談番組中で使われた計442件の「思う」という動詞に自称詞，対称詞，他称詞（3人称）のいずれかが現れたのはわずかに44件であったと報告している。その内訳は以下の通りで，自称詞，対称詞においては特に使用されない傾向が見て取れる。対称詞が1件も使用されていないことは注目すべきである。

自称詞：373件中350件は使用されず（93.8%）
対称詞：23件中23件は使用されず（100%）
他称詞：46件中25件は使用されず（54.3%）

では，自称詞や対称詞が使用されるのはどのような場合であろうか。以下，李（1991），伊豆山（1994），雨宮・林部（1993）を紹介し，使用の条件を学習者の視点から確定していきたい。

2.2.1. 李（1991）について

李は，任意に作成した自称詞・対称詞を含む例文の自然らしさを母語話者（計72名）に判断させている。例文が65から71と多く，そのため判断の正確さに疑問の余地がある調査であるが，その結果から人称代名詞が使用されない場合を次の5つに整理している。

(1)1対1の場合など，人称代名詞を使わなくても，その場の状況で誰のことを言っているのか分かるとき
(2)敬語など，言語の働きで誰のことを言っているのか分かるとき
(3)成句になった文で，人称代名詞が入る余地がない時（「ご卒業おめでとう」など）
(4)人称代名詞の相手の世界への差し込み機能が都合が悪いとき
(5)対句の形を持つ文でないとき

これらの条件のうち(3)(5)は問題がなかろう。(3)は「お誕生日おめでとう」「合格おめでとうございます」「失礼いたします」「ご無沙汰しています」等の挨拶語であり，自称詞・対称詞が出現することはない。また(5)の対比では対象の明示は必須であろう。これらは学習者にも分かりやすい基準である。ところが(1)(2)は，以下の反例が示すように，不使用のためのヒントにはなっても条件ではない。そのため，学習者としては納得できない状況にしばしば遭遇することになるだろう。

〈1対1の場合で言わなくても分かると思われるのに使用されている例〉
・おまえは誰だ？

〈敬語などで誰のことか分かると思われるのに使用されている例〉
・あなたがお書きになったのですね。

さらに李（1991）が最も重要な条件としてあげた(4)は，とても興味深い指摘ではあるが，学習者にとって，どのような状況が「相手の世界への差し込み機能が都合が悪いとき」なのかを知る手だてがない限り，お手上げである。よって李（1991）からは，自称詞・対称詞が出現するのは「対句（対比）の文」であるという見解を採用する。

2.2.2. 伊豆山（1994）について

伊豆山（1994）は語用論の視点から論じたものであるが，日本語の会話ではそもそも以下の3タイプの文において，主体を表す語句は出現しないという。

臨場系の文
観照系包含域の文
観照系排除域の文

臨場系の文とは時間的，空間的，文脈（言語的・非言語的）的に限定され，発話の現場に密着しているもので，命令，依頼，意志，勧誘，問いかけ，応答などの文を指すという。他方観照系とは，臨場系で言う限定がなく，発話の現場から離れたものであるとする。この説明から明らかなように，臨場系と観照系は互いに背反関係にあり，すべての文はそのいずれかに分類されることになる。ところで，上の説明から推察すると，2つの系はAustin（1962）の行為遂行文performative sentenceと事実確認文constative sentenceに対応していると思われる。この区別は結局Austin（1962）自身によって破棄されたが，文の

形を分類する際には便利な区別である。前者は発話行為を表すIfids (illocutionary force indicating devices) が常に明示されるのに対し，後者にはそれがない。そのため，前者は文の形のみから行為が確定できるが，後者は場面によって行為が異なり，文の形だけでは行為が確定できない。ここから判断すると，伊豆山は行為確定文には自称詞・対称詞は出現しないと主張しているようである。また伊豆山によると，観照系の包含域とは料理番組などの「次に魚を3枚におろします」のような表現を言い，同一意識で共同参加している動作や状態を表す文のことである。また排除域とは場面から明らかに主体が同定でき，主体以外の人が排除されているような場合を言い，受付で呼ばれて「すぐ行きます」と答える場合や危険を察知して「あっ落ちる」等の例が出されている。これらの例から分かるように，包含域と排除域は観照系ではあるが，発話の現場に密着したものである。Ifidsによる保証ではなく場面によって保証されたものではあるが，臨場系と同様発話行為的なのである。伊豆山の「主体を表す語句が出現しない場合」とは現場に密着した発話行為を遂行する文と考えていいだろう。ところで，Austin (1962) は結局すべての発話文は行為遂行的performativeであるという結論に行き着くが，それを考えるとその他の観照系も個々の発話場面では現場に密着し，行為を遂行し，それ故主体を表す語句をとらないことが考えられる。伊豆山では上の3タイプ以外の文では主体が現れると考えられているようだが，その他の観照系も行為遂行的になり，臨場性を帯びることがあることを考えると主体が出現しない場合もあり得る。伊豆山の指摘は，日本語の話し言葉は多くの場合主体が現れないが，上の3タイプ以外の場合に現れることがあるという指摘と理解したい。その意味では，伊豆山 (1994) には，自称詞・対称詞が出現する場合は特定されていないと理解する。

2.2.3. 雨宮・林部 (1993) について

雨宮・林部 (1993) は，ある刺激文に後続する会話を自由に作るという課題を用いて，主題導入文と主題展開文とで主題の省略がいかに行われるかを調査した。ここでいう主題導入文とは「～について言えば」「～の話だが」などのアズフォー句 (As-for phrase) ないしは疑問文の内容項「～はどこだ？」「～はいつだ？」の～の部分) で始まる (あるいはそう仮定してよい) 文を言う。32名の大学生にそれぞれ5つの会話を作ってもらい，各会話の長さは3文以上とし上限は設けられなかった。現れた文は省略文が非省略文を圧倒するものであったが，省略文の多くは主題展開文であり，非省略文の多くは主題導入文であったと報告されている[2)]。また一般には主題導入文に近い主題展開文ほど省略率が高くなるだろうと思われるが，省略率が最も高かったのは，導入文から少し離れた展開文であり，近くても遠くても省略率は低くなったという結果は大変興味深い。これは主題を理解することに時間がかかり，また主題を省略して話していても，談話が進むと再び主題を提示し確認することが行われるためであろうと考察されている。主題を長い間保持することが難しいのである。自称詞・対称詞の省略と主題の省略とは必ずしも同じではないが，自称詞や対称詞が主題となる場合の省略傾向がこの調査結果から推察できると思われる。すなわち，主題導入文においては主題である自称詞・対称詞が出現しやすいと考え，自称詞・対称詞の出現する第2番目の場合として「主題導入文」を採用する。

2.2.4. 甲斐澤 (1992) について

先にテレビの討論番組を調査した甲斐澤は，わずかに出現した自称詞，対称詞は「強調」の意味で使用されていたと述べている。しかし，次の引用を見ると，強調というのは，上で見た対比にも主題導入にも似ている部分がある。

> 「猫は」「日本人は」「日本人の人って」のように「犬か猫か」といった種類や「日本人か他の国の人か」といった種族などに分けられるもので，話し手が一般論としてその種類や種族についての真理や見解を述べるときに主語を明らかにする
>
> (甲斐澤 1992, p.99)

許斐 (1992) は，柴谷 (1978) が対比と主題導入の間に明確な線を引くことが難しいと述べていることを紹介しているが，柴谷によると，対比と主題導入の区別は，発声の強弱によるところがあり，また強声と弱声が連続しており境界がないことから，実際の会話内では特に区別が難しいというのである。それを考慮に入れると，甲斐澤の「強調」が対比や主題導入と似た印象を受けるのは仕方のないことかもしれない。しかし，実際上の判断の難しさと機能上の区別は別だと思われるので，ここでは対比と主題導入の区別に加え，その上で甲斐澤の強調は，そのどちらとも完全に同じではないとの判断から以下「特定」(3節参照) として自称詞・対称詞の出現する第3の場合とする。

2.2.5. まとめ

以上見てきたことをまとめると以下のようになる。

自称詞・対称詞が使用されるのは対比文と主題導入文，特定文であり，使用されないのは成句の文と主題展開文である。但し主題展開文でも主題の理解が遅れたり主題の保持を強固にしたりするときに，自称詞・対称詞が使用されることがある。また言語的・非言語的手段によって主体が明確になる場合も使用されない傾向がある。前者には敬語形式，発話行為遂行標識（Ifids）が考えられ，後者には場面・文脈などが考えられる。

この節では，自称詞と対称詞の表現間の使い分けと自称詞・対称詞の使用・不使用について従来の研究が明らかにしていることを学習者の視点から整理した。次節では，日本語母語話者による自然な会話に，それらがどのように分布し，またどのように機能しているかを見ることにしよう。

3．母語話者の自然な会話に見られる自称詞・対称詞の使用実態

3.1. 資料の概要

2人1組のインタビュー形式の会話20組。但しインタビューの形をとっているのは最初の発問のみで，インタビュアーとしての会話の主導はない。発問をきっかけに行われた自由会話という色彩が濃く，会話はさほど改まったものではない。会話の参加者はインタビュアーとして女子大学生1名，インタビューを受けた側として大学生男女各5名と中高年男女各5名の20名，合計21名であった。会話の収録は広島県，愛知県で，1999年9月から11月にかけて行われた。全会話時間数は2時間31分53秒（9,113秒）であった。

3.2. 結果と考察

表1は自称詞と対称詞に使用された表現とその使用回数を個人別にまとめたものである。ここから，以下の4点が明らかになった。

(1)自称詞や対称詞が使用されるのは全ターン回数のおよそ1割程度であった。
(2)自称詞が多く使用され，対称詞はあまり使用されなかった。
(3)表現としては，自称詞にはもっぱら人称代名詞が使用され，対称詞には人称代名詞以外の形も見られた。
(4)自称詞や対称詞の談話内での機能は，「特定」「対比」「話題導入」「明示」の順に多かった。それぞれの割合はおよそ6：2：1：1であった。

以下詳述する。

表1　自然談話における自称詞／対称詞の表現別出現数（個数）

	自称詞											対称詞					
	私	あたし	うち	自分	僕	俺	我々	わいし	わし	親族名称	合計	あなた	あんた	おまえ	自分	親族名称	固有名詞	合計
om1						1				5	6							0
om2											0							0
om3					8						8							0
om4	2					2					4	2		1				3
om5											0			1				1
of1	3										3							0
of2	1						1				2							0
of3	2										2							0
of4	6	1		4							11							0
of5	1							3	3	2	9		3					3
ym1						5					5							0
ym2						6					6							0
ym3			2	4		18					24							0
ym4				1		10					11							0
ym5				1		4					5							0
yf1											0							0
yf2	8	2		5							15							0
yf3	1										1							0
yf4	2										2							0
yf5	2						1				3						2	2
if1	2										2							0
if2											0							0
if3											0							0
if4	4	1	1								6					1		1
if5	2										2					1		1
if6	3										3	<1>						1
if7	6	1	1								8							0
if8											0					<1>		1
if9											0						1	1
if10	1										1					<1>		1
if11	4										4	<1>						1
if12	12		2								14	<1>			2			3
if13	3	3		1							7							0
if14	2										2	<2>						2
if15	5										5	<1>			1			2
if16											0	<1>						1
if17	3	1	1								5	<1>			1			2
if18	5	1									6	1<1>			1			3
if19	6										6	<1>						1
if20	2	1									3						1	1
合計	88	11	7	16	8	46	2	3	3	7	191	3<10>	3	2	5	2<2>	4	31

Om：中高年男性　Of：中高年女性　if：インタビュアー（会話別に集計した）
Ym：大学生男性　Yf：大学生女性　<>：会話開始時の発問に現れた「あなた」などの数

3.2.1. 自称詞ならびに対称詞の使用頻度

自称詞ならびに対称詞の使用頻度については，後に教科書での出現頻度と比較するため，話者交替数（ターン）を基準とした。文の数，談話時間などを基準とすることもあり得たが，前者は教科書では容易に数えあげられるが自然会話ではその認定が難しく，また後者は自然会話にはいいが教科書では割り出せない。そこで教科書と自然な会話の両方において利用できる基準ということで話者交替数を利用することにした。但し実際の会話では相づちのみの発言が非常に多く，それを話者交替数に入れると，相づちの少ない教科書との比較が意味をなさず，また，話者交替に入れないと相手の発言が非常に長くなり，言ってみれば一つの物語が1ターンとなり，これも比較には向かない。そこで，以下の方法をとって話者交替数とした。相づちのみの発言は話者交替に入れない。但しその直後の相手の発言は新しく話者交替が行われたものとして数える。相づちが打たれる場所は，基本的には話者交替が可能な場所（TRP）であるという考えに基づいている。これによって数えあげた話者交替数は2,088であった。

総計222件の自称詞・対称詞は全話者交替の10.6%に出現したことになる。

3.2.2. 自称詞と対称詞の使用割合

全会話中に見られた自称詞は191件，対称詞は31件，合計222件であった。自称詞と対称詞の割合はそれぞれ86.0%，14.0%で，圧倒的に自称詞が多い。先に見た甲斐澤（1992）のテレビの討論番組でも自称詞23件，対称詞0件という結果であった。ただこの調査は「思う」という動詞の主語に限定したものなので，直接には比較できないが，日本語では自称詞に比べて対称詞は使用されにくいことが分かる。

3.2.3. 表現の種類

表現の種類としては人称代名詞，親族名称，固有名詞が見られたが，その内訳はそれぞれ207件，11件，4件で，圧倒的に人称代名詞が多かった。特に自称詞にその傾向が強い（184：7：0）。一方対称詞の「あなた」はインタビュー開始の発問「あなたは～についてどう思いますか」に使用されたものが多く（13件中10件），会話中の他の部分とは異なり丁寧体「ます」が用いられていることも考え合わせると，他の対称詞と同列には扱いにくい。今，仮にそれを除いて比較すると，対称詞では人称代名詞と共に親族名称や固有名詞も決して少なくないと言える（13：4：4）。対称詞としての人称代名詞は攻撃性が強い（三輪 2000）と言われることがあるが，決まり文句のように使われている発問での「あなた」ですら，中高年の相手には使用されず，もっぱら同年の大学生にのみ用いられていることは注目したい。

次に個々の表現間については，自称詞では女性が「私」，大学生男性が「俺」を使用するという一定の傾向があるようである。しかし，中高年の男性には決まった形は見られず，個人によって異なる表現を使用している。しかし中高年男性の使用も「私」「俺」「僕」内におさまり，この3種類で全自称詞の74.3%を占めていた。対称詞については，鈴木（1973）の指摘通り目上には親族名称が用いられるということと，同年に対しても人称代名詞は使いにくいと見えて，使っている場合も本来自称である「自分」という形を対称詞として使用しているということが見て取れる。

しかしそれ以上に重要なことは，そもそも対称詞は使用しないということだろう。

3.2.4. 自称詞と対称詞の文脈内での機能

2において従来，自称詞や対称詞は，対比文，主題導入文，そして特定文に現れると考えられていることを見た。自然会話では，これらの機能以外に「明示」「強調」としてまとめた機能が観察された。

(1)対比・比較：2つのものを比較対比している場合。比較対象が明示的であるもの
(2)話題導入：話題導入と話題終了時のまとめをこのグループに入れた。
(3)特定：特に何かと対比・比較するものではなく，特定のものを取り立て言及するもの。不特定のものとの対比・比較であるという考え方もできるが，ここでは比較対象が明示されていないことを基準とし，(1)とは区別した。
(4)明示：登場人物が複数いて行為の主体がわかりにくい場合。これは省略すると意味がわかりにくくなる。
(5)強調：このグループには他者（あるいは過去の自分）の発言を引用あるいはそれを装い臨場的な効果をねらったものと，賞賛，非難などで主体を明示することによってそのアドレス性を強化するものを含めた[3]。

表2は，上にあげた5つの用法別にその使用数を比較したものである。また，その際省略可能なものの数も示した[4]。省略可能とはそれら自称詞・対称詞がなくても，発言に違和感がなくかつ意味の取り違えもないと判断されたものである。

表2　自然談話における自称詞／対称詞の機能別出現数とその省略可能数（個数）

		対比・比較	話題導入	特定	明示	強調	合計
自称詞	出現数	36	19	118	13	5	191
	省略可能数	8	14	65	3	5	95
対称詞	出現数	6	0	23	0	2	31
	省略可能数	1	0	21	0	2	24
合計	出現数	42	19	141	13	7	222
	省略可能数	9	14	86	3	7	119

表2から分かることは，省略することができないものは対比比較と明示であり，省略できるものは強調，話題導入である。そして特定に関しても6割は省略可能であった。ここから自称詞・対称詞は，なくては意味をなさない場合（対比，明示）に現れるが，それのみが基準ではなく，省略可能であっても使用される場合が多いことが分かる。その点で，特定と分類されたものについて問題が残る。今後の課題である。

では，次の節では，いよいよ教科書の分析に入ろう。

4．教科書の会話に見られる自称詞・対称詞

分析に用いた教科書は以下の通りである。比較的広範囲に使用され，出版年の新しいものという基準で選んだが，筆者達の一人が台湾出身であることも考慮し，台湾で好んで使用される教科書も含めた。

表3　分析対象とした日本語教科書一覧

教　科　書	略　称	出版年・月	レベル
日本語Ⅰ（国際学友会日本語学校）	日本語Ⅰ	1977.6	初級
文化初級日本語Ⅰ	文化初級Ⅰ	1988.10	初級
新日本語基礎Ⅰ	新基礎Ⅰ	1990.1	初級
初級日本語（東京外国語大学）	初級日本語	1990.3	初級
文化初級日本語Ⅱ	文化初級Ⅱ	1990.3	初級
日本語中級（国際交流基金一日本語国際センター）	日本語中級	1990.7	中級
新日本語基礎Ⅱ	新基礎Ⅱ	1993.3	初級
もみじⅠ	もみじⅠ	1994.3	初級
もみじⅡ	もみじⅡ	1996.3	中級
みんなの日本語初級Ⅰ本冊	みんなⅠ	1998.3	初級
トピック楽しく学ぼう日本語会話	トピック	1998.3	中・上級
みんなの日本語初級Ⅱ本冊	みんなⅡ	1998.6	初級
現代日本語中級総合講座	現代中級	1998.10	中級
げんきⅠ	げんきⅠ	1999.1	初級
げんきⅡ	げんきⅡ	1999.5	初級
にほんご90日1	にほんご90日1	2000.2	初級
にほんご90日2	にほんご90日2	2000.5	初級
にほんご90日3	にほんご90日3	2000.7	中級

4.1. 自称詞・対称詞の使用頻度

自称詞・対称詞の使用頻度については，自然会話のところで述べたように話者交替（ターン）数を基準とする。ターンあたりの発言量は様々であるが，教科書では話者交替がきちんと表示されており，自然会話において文の数や一まとまりの話を見つけることに比べ，簡単でかつ信頼できる数を求めることができるからである。自然会話の話者交替数とは必ずしも重なり合わないが，大まかな比較はできると思われる。

各教科書に現れた話者交替数は表4に示されている。図1は自称詞・対称詞が使用された話者交替の割合を教科書別に示したものである。多くの教科書は予想外に自称詞・対称詞が使用されていない。もっと多く使用されているのではないかと思ったが，自然会話での使用頻度と同程度，あるいはむしろより少ない教科書がほとんどである（図1参照）。例外は『にほんご90日』シリーズ『トピック』『日本語Ⅰ』『げんきⅡ』

表4　教科書に見られる自称詞／対称詞の出現頻度（総出現数／総ターン数×100）

教　科　書	自称詞数	対称詞数	自称詞・対称詞の総出現数	総ターン数	自称詞・対称詞の出現頻度(%)
日本語Ⅰ	66	56	122	590	20.7
文化初級日本語Ⅰ	15	12	27	226	11.9
新日本語基礎Ⅰ	8	8	16	177	9.0
初級日本語	56	46	102	651	15.7
文化初級日本語Ⅱ	22	16	38	475	8.0
日本語中級	9	4	13	321	4.0
新日本語基礎Ⅱ	6	10	16	228	7.0
もみじⅠ	14	4	18	302	6.0
もみじⅡ	17	14	31	349	8.9
みんなの日本語初級Ⅰ本冊	6	8	14	238	5.9
トピック楽しく学ぼう日本語会話	64	43	107	251	42.6
みんなの日本語初級Ⅱ本冊	14	3	17	259	6.6
現代日本語中級総合講座	40	7	47	580	8.1
げんきⅠ	4	12	16	188	8.5
げんきⅡ	20	15	35	171	20.5
にほんご90日1	47	49	96	402	23.9
にほんご90日2	37	22	59	351	16.8
にほんご90日3	36	22	58	410	14.1

『初級日本語』等である。なかでも『トピック』はほぼ2から3ターンに一度の割合で使用され自然会話と大きく異なるが，この教科書は家族間の会話が多く，われわれの自然会話と直接比較することはできないかも知れない。その意味では，いずれの教科書も使用頻度という点ではかなり自然会話に近いものであると言うことができるだろう。

4.2. 自称詞と対称詞の出現数比較

自称詞と対称詞の出現総数は，自称詞：481（表5参照）件，対称詞：351件（表6参照）で，その比率は57.8%：42.2%であった。この比率は，我々が調査した自然会話の86.0%：14.0%，また甲斐澤のテレビの対談番組の84.4%：5.2%と比較すると大きく異なり，対称詞の多さが目につく。ただ自称詞と対称詞の比率は教科書によって大きく異なっており（図2参照），自然会話に近い比率の教科書もあれば，対称詞の方が多い教科書もある。しかし自称詞・対称詞の使用数自体が少ない教科書ではそれはさほど大きな問題ではないだろう。そこで，比較的使用数の多い教科書での自称詞と対称詞の出現比率を見ると，『日本語Ⅰ』『初級日本語』『トピック』『にほんご90日』シリーズにおいて対称詞が多いことに気づく。

4.3. 自称詞と対称詞に用いられた表現

表5，表6は各教科書に使用されていた自称詞・対称詞の数を表現別に整理したものである。表5から分かるように，自称詞ではほとんどが人称代名詞（95.4%）であった。自称詞の人称代名詞には様々な表現が現れたが，「わたし（「私」を含む）」が最も多く全人称代名詞中74.9%を占め，「ぼく（「僕」を含む）がそれに続いた（15.5%）。そして対称詞（表6参照）では固有名詞（54.9%）と人称代名詞（32.5%）でほぼ9割を占めた。固有名詞では「～さん」（90.7%），人称代名詞では「あなた」（77.2%）がほとんどで，それ以外の形は非常に少なかった。

しかしこれについても教科書によって傾向は大きく異なる。表7左は自称詞の人称代名詞として「わたし」を使用した割合を教科書別に示したものであるが，これを見ると，専ら「わたし」を使用する教科書と「わたし」以外のものも使用する傾向にある教科書があることが見て取れよう。前者には『日本語Ⅰ』『初級日本語』『文化初級Ⅰ』『にほんご90日』シリーズ等が，そして後者には『トピック』や『現代中級』『げんきⅡ』などがある。『トピック』や『現代中級』は「僕，俺，わし」など様々な形を採用しているのも特徴である。また対称詞にしても表現としては「あなた」と「～

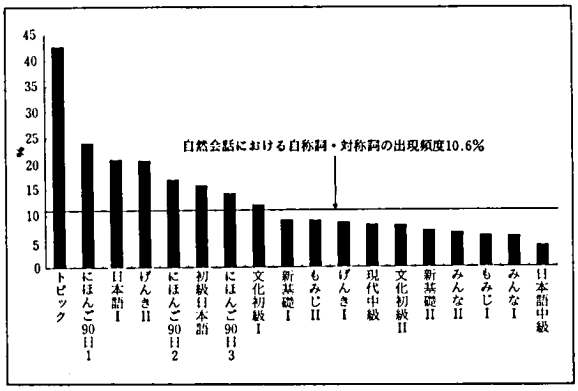

図1　教科書における自称詞・対称詞の出現頻度比較

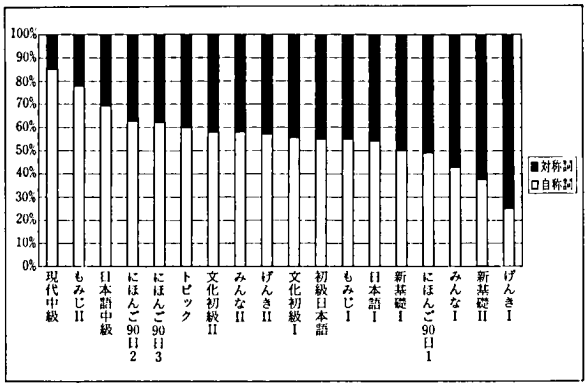

図2　教科書における自称詞・対称詞出現割合比較

表5　教科書における自称詞表現別出現数（個数）

自称詞	人称代名詞																					その他								
教科書	わたし	私	ぼく	僕	あたし	わたくし	おれ	俺	わし	わたしたち	私たち	私達	私達二人	僕達	ぼくたち	私たち教師	われわれ	私ども	自分	小計		家族	うちの	名前	お母さん	お父さん	お姉さん	みんな	小計	合計
日本語I	61	1		1						3										66								0	0	66
文化初級日本語I		15																		15									0	15
新日本語基礎I	6									1										7								1	1	8
初級日本語	46	3								5						1				55								1	1	56
文化初級日本語II		13		2		2					4									21								1	1	22
日本語中級		6	1															1	1	9									0	9
新日本語基礎II	4	1								1										6									0	6
もみじI	12		1																	13		1							1	14
もみじII	11		4												1					16				1					1	17
みんなの日本語初級I本冊	6																			6									0	6
トピック楽しく学ぼう日本語会話		28	2	19				1	5			4	1	1						61			1			1	1		3	64
みんなの日本語初級II本冊	9			4																13								1	1	14
現代日本語中級総合講座	18		15		1		2			2							1			39			1						1	40
げんきI	1	1	1																	3								1	1	4
げんきII		4	9								2								1	16			2		2				4	20
にほんご90日1		45	1								1									47									0	47
にほんご90日2		24	9																2	35			2						2	37
にほんご90日3	29		2																	31			3					2	5	36
合計	203	141	45	26	1	2	2	1	5	12	7	4	1	1	1	1	1	1	4	459		1	9	1	2	1	1	7	22	481

表6　教科書における対称詞表現別出現数（個数）

対称詞	人称代名詞							固有名詞							親族名称									その他							
教科書	あなた	あんた	君	おまえ	あなた方	小計		さん	君	名前	ちゃん	さん達	小計		お母さん	姉さん	おじいちゃん	先生	先生がた	お客様	お客さん	奥さん	小計	おうち	お宅	皆さん	みんな	みなさん	皆様	小計	合計
日本語I	50				1	51		1		1			2		1								1			2				2	56
文化初級日本語I						0		10					10										0					2		2	12
新日本語基礎I	2					2		6					6										0							0	8
初級日本語	16					16		28					28								1		1					1		1	46
文化初級日本語II	3					3		8		1			9			1				1			2	1	1					2	16
日本語中級						0		2					2										0		2					2	4
新日本語基礎II						0		8					8									1	1						1	1	10
もみじI						0		3					3		1								1							0	4
もみじII						0		12	1				13										0				1			1	14
みんなの日本語初級I本冊						0		6	1				7										0			1				1	8
トピック楽しく学ぼう日本語会話	13	3	13	6		35			1		1		2			2	4						6							0	43
みんなの日本語初級II本冊						0		2					2					1					1				0			0	3
現代日本語中級総合講座	1			1		2							0						2				2		1		2			3	7
げんきI						0		12					12										0				0			0	12
げんきII	1					1		2	4	7	1		14										0							0	15
にほんご90日1	1		1			2		45					45					2					2							0	49
にほんご90日2	1					1		18					18					1					1				1	1		2	22
にほんご90日3			1			1		12					12							2			2		1			6		7	22
合計	88	3	15	7	1	114		175	7	9	2	1	193		2	3	4	4	2	3	1	1	20	1	5	3	4	10	1	24	351

さん」にほぼ限定されるが，前者を多用する教科書と後者を多用する教科書がある。表7右はその割合を比較したものだが，「あなた」派には『日本語Ⅰ』『トピック』があり，「～さん」派には『にほんご90日』シリーズ，『げんきⅠ』『もみじⅡ』など多数がある。但し『トピック』の「あなた」は夫婦間で用いられたものであることをつけ加えておこう。

表7　自称詞／対称詞における「わたし」と「あなた」の出現数

教科書	自称詞 わたし形	自称詞 その他	自称詞 小計	対称詞 あなた	対称詞 ～さん	対称詞 小計
日本語Ⅰ	62	4	66	50	1	51
文化初級日本語Ⅰ	15	0	15	0	10	10
新日本語基礎Ⅰ	6	1	7	2	6	8
初級日本語	49	6	55	16	28	44
文化初級日本語Ⅱ	13	8	21	3	8	11
日本語中級	6	3	9	0	2	2
新日本語基礎Ⅱ	5	1	6	0	8	8
もみじⅠ	12	1	13	0	3	3
もみじⅡ	11	5	16	0	12	12
みんなの日本語初級Ⅰ本冊	6	0	6	0	6	6
トピック楽しく学ぼう日本語会話	28	33	61	13	0	13
みんなの日本語初級Ⅱ本冊	9	4	13	0	2	2
現代日本語中級総合講座	18	21	39	1	0	1
げんきⅠ	2	1	3	0	12	12
げんきⅡ	4	12	16	1	2	3
にほんご90日1	45	2	47	1	45	46
にほんご90日2	24	11	35	1	18	19
にほんご90日3	29	2	31	0	12	12
合　計	344	115	459	88	175	263

4.4. 機能別の出現数比較

表8は機能別に見た自称詞・対称詞の出現数を教科書別に整理したものである。全体的に見ると，自然会話同様，特定や対比が多く，話題導入，明示，強調は少なかった（最下段合計欄参照）。ただ，自然会話では特定と対比の割合が3：1程度であったものが，教科書では2：1程度になり，対比用法の多さが目についた。特に対比用法の多かった教科書は『新日本語基礎Ⅰ』『新基礎Ⅱ』『もみじⅠ』『みんなⅠ』『にほんご90日1』『にほんご90日2』である。『初級日本語』に話題導入用法が多いのも目をひく。

表8　教科書における自称詞／対称詞の機能別出現数とその省略可能数

教科書	自称詞 対比比較 出現数	自称詞 対比比較 省略可	自称詞 話題導入 出現数	自称詞 話題導入 省略可	自称詞 特定 出現数	自称詞 特定 省略可	自称詞 明示 出現数	自称詞 明示 省略可	自称詞 強調 出現数	自称詞 強調 省略可	自称詞 小計 出現数	自称詞 小計 省略可
日本語Ⅰ	17	10	8	4	41	32					66	46
文化初級日本語Ⅰ	7	4			8	5					15	9
新日本語基礎Ⅰ	5	2			3	3					8	5
初級日本語	10	4	12	10	34	15					56	29
文化初級日本語Ⅱ	7	2			15	10					22	12
日本語中級	2	1			7	1					9	2
新日本語基礎Ⅱ	3	3			3	1					6	4
もみじⅠ	7	4	1		6	2					14	6
もみじⅡ	3	2	1		13	7					17	9
みんなの日本語初級Ⅰ本冊	4	3			1		1	1			6	4
トピック楽しく学ぼう日本語会話	14	5	6	2	40	18	2	1	2		64	26
みんなの日本語初級Ⅱ本冊	3		1	1	7	4	2	1	1		14	6
現代日本語中級総合講座	14	3	1		24	10	1				40	13
げんきⅠ	1				2		1				4	0
げんきⅡ	6	2			9	4	4	1	1		20	8
にほんご90日1	19	8	1	1	27	21					47	30
にほんご90日2	18	8	1		18	14					37	22
にほんご90日3	10	2	1	1	22	14	3	1			36	18
合　計	150	63	33	19	280	161	14	5	4	0	481	249

教科書	対称詞 対比比較 出現数	対称詞 対比比較 省略可	対称詞 話題導入 出現数	対称詞 話題導入 省略可	対称詞 特定 出現数	対称詞 特定 省略可	対称詞 明示 出現数	対称詞 明示 省略可	対称詞 強調 出現数	対称詞 強調 省略可	対称詞 小計 出現数	対称詞 小計 省略可
日本語Ⅰ	7	6	1	1	45	37	2	1	1	1	56	46
文化初級日本語Ⅰ	3		3	3	6	3					12	6
新日本語基礎Ⅰ	3	1			5	3					8	4
初級日本語	10	5	3	3	31	20	1	1	1		46	29
文化初級日本語Ⅱ	4		5	4	5	4	2				16	8
日本語中級			1	1	2	1	1				4	2
新日本語基礎Ⅱ	5	2			4	1	1				10	3
もみじⅠ			1	1	3	3					4	4
もみじⅡ	2	1	2	1	6	1	2		2	1	14	4
みんなの日本語初級Ⅰ本冊	5	1			3	3					8	4
トピック楽しく学ぼう日本語会話	5	1	3	2	22	12	1		12	4	43	19
みんなの日本語初級Ⅱ本冊	1				2	1					3	1
現代日本語中級総合講座					3	2	2		2		7	4
げんきⅠ	1	1			11	9					12	10
げんきⅡ	4				9	2	2				15	2
にほんご90日1	13	1	7	7	29	24					49	32
にほんご90日2	3	2	9	8	8	4					22	14
にほんご90日3	6	1	1		11	9	4	2			22	12
合　計	72	22	36	31	205	139	18	4	18	6	351	204

また各用法の省略可能性についても，自然会話に近い傾向のものと自然会話とは異なる傾向のものがあった。前者には特定，明示用法が，後者には対比，話題導入，強調が該当している（表9参照）。自然会話と異なる傾向は，以下の通りである。

対比：自然会話では省略できないものが多いのに，教科書では省略できるものが多い。

表9　自称詞・対称詞の機能に関する自然会話と教科書との比較　　（ ）は省略可能数

自然会話	対比・比較 出現数（省略可能）	対比・比較 割合	話題導入 出現数（省略可能）	話題導入 割合	特定 出現数（省略可能）	特定 割合	明示 出現数（省略可能）	明示 割合	強調 出現数（省略可能）	強調 割合	その他 出現数（省略可能）	その他 割合
自称詞	36 (8)	22.20%	19 (14)	73.70%	118 (65)	55.10%	13 (3)	17.80%	4 (4)	100%	1 (1)	100%
対称詞	6 (1)	16.70%	0 (0)		23 (21)	91.35%	0 (0)		0 (0)		2 (2)	100%

教科書	対比・比較 出現数（省略可能）	対比・比較 割合	話題導入 出現数（省略可能）	話題導入 割合	特定 出現数（省略可能）	特定 割合	明示 出現数（省略可能）	明示 割合	強調 出現数（省略可能）	強調 割合
自称詞	150 (63)	42.00%	33 (19)	57.60%	280 (161)	57.50%	14 (5)	36.00%	4 (0)	0%
対称詞	72 (22)	30.60%	36 (31)	86.10%	205 (139)	67.80%	18 (4)	22.20%	18 (6)	33.30%

話題導入：自然会話ではほとんど省略できるのに，教科書では省略できないものがある。
強調：自然会話では全て省略できるのに，教科書では省略できないものが多い。

以下，教科書からの具体例を見ながら，このような傾向になった理由を考える。

〈話題導入の場合〉

省略不可と判断された用例が多い教科書は『日本語Ⅰ』『トピック』である（表8参照）。以下の例から分かることは，『日本語Ⅰ』では会話の導入に先立つ説明としての『話題導入』が多い。場面設定や状況説明であり卜書きのような役割を果たしており，省略できないと判断された。『トピック』の方は特別な例ではない。むしろわれわれが観察した自然会話が，あらかじめ設定された一つの話題についての会話であったことから，改めて明示する必要性を感じなかったのであろうが，教科書のように話題が会話中に作られていくものでは省略すると不自然に感じられた。話題導入での相違は談話の性格から来るものと結論づけられる。

・今私は料理の勉強をしています。
（『日本語Ⅰ』p.77）

・阿部さんは昨日学校を休みました。それで私は今日阿部さんのうちを訪ねました。
（『日本語Ⅰ』p.141）

・君にしては珍しく厳しい意見だね。
（『トピック』p.3）

・おじいちゃん，一人でつまらないでしょ。一緒に尻取りしよっか。
わしは尻取りの名人じゃ。
（『トピック』p.136）

〈強調の場合〉

強調は，自然会話では全てが省略可能と判断された。教科書内で省略できない「強調」が見られたのは『トピック』である（表8参照）。以下の例が示すとおり，他者あるいは過去の自分の言葉を引用するものと，争いの場面などでことさらに相手を明示することによって非難の効果をあげるものが多かった。省略不可ではないが，省略しない方が自然と解釈されたのであろう。ちなみに自然会話中の「いいこと言うよ，俺は」のように，平穏な場面では省略しても差し支えないと解釈されている。

・「俺だけはカード地獄に陥らない」なんて調子いいこと言ってたくせに。
（『トピック』p.10）

・君は家庭のこと考えていればいいんだよ。
（『トピック』p.3）

・誰があんたなんかとドライブ行くもんですか。
（『トピック』p.87）

〈対比の場合〉

対比用法は出現数自体も多いが，省略可能数も多い。自然会話ではほとんどが省略不可であったのと対照的である。対比用法は，以下の例が示すような文に現れている。

・さあ，夕食の用意をはじめましょう。マナさんは森へ行って，木のえだをあつめて来てください。
わたしは米を洗ったり，やさいを切ったりします。
（『初級日本語』p.144）

・リンさんはこの学校を卒業したあとでどうしますか。
まだ決めていません。ブラウンさんは？
私は日本の大学に入ろうと思っています。
（『にほんご90日2』p.21）

・（サッカーを）高校のクラブでやっていました。
ブラウンさんは何が一番好きですか。
僕はスノーボードです。
（『にほんご90日2』p.33）

・車にガソリンを入れなければならないから，このガソリンスタンドに寄りましょう。
わたしも降りた方がいいですか。
いいえ，あなたは降りなくてもかまいません。
（『日本語Ⅰ』p.120）

これらの対比用法は，同じ文型を使って相手に話しかけたり自分で話を展開させたりすることができるという点で，学習初期段階に有効な方略の一つであるかもしれないが，やはり自然な会話とは言いにくく，架空に作られたものという印象が強い。さらに，「ブラウンさん－私」「ブラウンさん－僕」「わたし－あなた」のように同一人物が別の話者によって2度言及される場合があり，そのために出現回数も増え，また省略可能と判断される例が多くなったものと思われる。

4.5. まとめ

以上見てきたことをまとめると表10のようになる。斜線を記した教科書は，4.1.から4.4.において観察した視点に関して自然会話とは異なる傾向が見られたものである。自称詞・対称詞に関して，われわれが調査した18冊の教科書の多くは，全体的な使用頻度，用法別の使用頻度において，おおむね自然な会話に近いものであった。その意味ではこれらの教科書のいずれにおいても，学習者は自称詞・対称詞が使用される例，されない例を自然に目にするように出来ていると言える。ただ，全体的な使用頻度が若干高かった教科書も少なからずあった。しかし，それらは表9から明らかなように，対称詞の多さが引き起こしたものであった。対称詞の使用傾向については，さらに多くの自然な談話を観察する必要があるが，教科書内の対称詞はやはり多すぎるのではないかと思われる。

また，自称詞・対称詞の表現に関しては，自然会話でも「私，俺，僕」「～さん」で間に合っていたので，「私」「～さん」に片寄った教科書も大きな問題はないと言えるが，他の表現形式が含まれるのは有益であろうと思われる。対称詞の「あなた」は1冊をのぞいて適切な使用であったと言える。

用法別の使用に関しては，多くが特定と対比に使用され，その点では自然会話に近いものであったが，教科書に特徴的なこととして，対比・比較という対立図式を用いた会話が多かったこと，しかもそれらが問いと答という形の中で同一人物を2度ずつ言及していたことは，不自然な会話という印象を与えられた。

5．おわりに

自称詞・対称詞の使用という点から，日本語教育において比較的よく使用されている18冊の教科書を調査し，自然な会話での使用と比較してきた。自然な会話としてはさらに様々なタイプの会話を調査する必要があるが，とりあえずこの段階での結論をまとめた。表10を見ると，比較的自然な会話に近い教科書とそうでない教科書があることが分かる。それぞれの教科書を用いた学習では，学習者にどのような点について注意を促す必要があるかおおよそ見当がつけられるだろう。但し，今回の用法の分類には問題が残った。対比，話題導入，特定を明確に区別することが難しい中で，結果的に多くの使用を「特定」に分類してしまったと思われる。特に，特定用法の場合には省略されることもあればされないこともあるだけに，本研究は学習者への指導という点からは未だ不十分と言わなければならない。この点については今後の課題である。

表10　自称詞・対称詞に関する自然会話と教科書との比較

教科書	自・対称詞の出現が多い	対称詞の出現割合が多い	自称詞として「私」が多い	対称詞として「あなた」が多い	対比用法が多い	省略可能な対比用法が多い
日本語Ⅰ	／	／	／	／		／
文化初級日本語Ⅰ		／	／			／
新日本語基礎Ⅰ					／	／
初級日本語	／	／	／			／
文化初級日本語Ⅱ		／				
日本語中級						
新日本語基礎Ⅱ					／	／
もみじⅠ					／	／
もみじⅡ		／				
みんなの日本語初級Ⅰ本冊					／	／
トピック楽しく学ぼう日本語会話	／	／		／		／
みんなの日本語初級Ⅱ本冊						
現代日本語中級総合講座						
げんきⅠ						
げんきⅡ	／	／				
にほんご90日1	／	／	／		／	／
にほんご90日2	／	／	／		／	／
にほんご90日3	／	／	／			

【注】

1）辻村（1968）によると上古から現代までに登場した1人称は51個，2人称は81個にのぼるそうである。

2）雨宮・林部（1993）では図表のみで数値が明記されていないのがざんねんである。

3）強調には以下の例に示すような用法を含めた。

引用：意識がたりんのじゃーとかって，おまえできると思っとんかって

賞賛：（「いいこと言うじゃん」を受けて）いいこと言うよ，俺

非難：時間には遅れてほしくないよね，しょっちゅうやもん，お前

4）省略可能かどうかの判断は母語話者2名（女性40代教員，女性20代大学院生）によって行なわれた。

【参考文献】

①雨宮朋子・林部英雄（1993）「日本語における“談話主題”の省略に関する実験的研究」『横浜国立大学教育紀要』第33集　265-280.

②Austin, J. L. (1962) *How to do things with words.* Oxford Uni. Press. 坂本百大訳　『言語と行為』

大修館書店
③伊豆山敦子（1994）「日本語教科書のための話し言葉文法基礎研究　無主体動詞語句の構文的意味」獨協大学外国語学部『言語と文化』第1号　72-88.
④陣内正敬（1990）「『サザエさん』に見られる呼びかけ語」九州大学言語文化部『言語文化論究』No.1 71-77.
⑤甲斐澤とし子（1992）「話しことばにおける「省略」の研究「思う」とその主語の省略について」昭和女子大学『学苑』627. 122-129.
⑥神崎高明（1994）『日英語代名詞の研究』研究社出版
⑦金田一春彦（1988）『日本語新版』岩波新書
⑧許斐慧二（1992）「最近の日本語主題文の分析について」『九州工業大学情報工学部紀要人文社会科学篇』5　111-133.
⑨李方（1991）「日本語の人称代名詞の省略について」愛媛大学国語国文学会『国文研究』第41号　45-55.
⑩三輪正（2000）『人称詞と敬語』人文書院
⑪野元菊雄（1979）『月刊言語』3月号
⑫大西智之（1992）「日本語の自称詞と人称代名詞鈴木説再考」『帝塚山大学教養学部紀要』第30号 26-46.
⑬蔣秋菊（1999）「人称代名詞の日中対照　中国人学生の誤用例を交えて1」『講座日本語教育』　第35分冊　早稲田大学日本語研究教育センター　65-76.
⑭鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
⑮辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』東京堂出版
⑯梅棹忠雄（1988）『日本語と日本文明』くもん出版